HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	カステリヨン訳仏語聖書の語彙分析 ： 寛容の多様性
Author(s)	小山, 誠南
Citation	北海道大学大学院教育学研究院紀要, 141, 43-66
Issue Date	2022-12-22
DOI	https://doi.org/10.14943/b.edu.141.43
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/87578
Type	departmental bulletin paper
File Information	06-1882-1669-141.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

カステリヨン訳仏語聖書の語彙分析

― 寛容の多様性 ―

小　山　誠　南*

【目　次】
１．はじめに
２．カステリヨンの生涯と16世紀フランスの寛容
（1）カステリヨンの生涯と著述
（2）16世紀フランスにおける寛容
３．翻訳聖書の分析
（1）書誌的背景
（2）翻訳聖書の特質とその構成
（3）「寛容」の語彙分析
４．小括と今後の展望
【キーワード】セバスティアン・カステリヨン，フランス語，聖書，寛容，垂直的人間関係，完成可能性への期待

１．はじめに

明治期の高名なキリスト教思想家にして，札幌農学校２期生でもある内村鑑三（1861-1930）は，日清・日露戦争間に絶対的非戦主義へと転向する過程で次のように書き記している。

> 聖書は神の開発的自顕を録した書でありまして，其始より絶対的に神の聖意を顕はしたものではありません，神は戦争を是認して，之を旧約時代の勇者に許し給ふたのではありません，「彼等の心の頑硬なるため」に彼等が其罪悪なるを覚り得るまで，曰はゞ之を黙許したのであります[1]

ここに引用したのは「平和の福音」と題された，明治36年９月２日付の短編の一部である。この記述に続けて内村は，「もし，だれかがあなたの右の頬を打つなら，ほかの頬をも向けてやりなさい」という台詞で有名な「マタイによる福音書」（５：38-42）を引き合いにした上で，神がイエスを通じて「斯う云ふ福音を宣べさせ給ひました時に復讐の精神と之に伴ふ戦争とは絶対的に非認された」[2]とする。平和を希求する内村にとって，ハムラビ法典に代表される古代オリエント法の同害報復を超越したイエスの教えは，自身の絶対非戦論を強力に後押ししたこ

* 北海道大学大学院教育学院博士後期課程

[1]『内村鑑三選集２　非戦論』，岩波書店，1990，60-61頁。

[2] 同前，61頁。

DOI：10.14943/b.edu.141.43

とだろう。事実,「山上の垂訓」は「キリスト教倫理の真髄」[3]と評され，無抵抗・非暴力主義,敵への愛といった表現から，キリスト教的「寛容（tolérance）」の発露とさえ理解され得る[4]。

日本語としての「寛容」について,『広辞苑』をはじめとする国語辞典の記述の要点は①他者を咎めない，②他者をゆるす，③他者を受け容れるという３点に集約され,「寛容」は何よりも個人の問題と見做される傾向にあるという。他方キリスト教においても，前の引用に加えて「マタイによる福音書」（22：34-40）や「ルカによる福音書」（６：27-30，６：37-38）等の聖書の記述は,「寛容」がやはり個人の問題であったことを暗示している[5]。例えば平凡社の『哲学事典』のように，先述のイエスの教えをレフ・トルストイやマハトマ・ガンディーに代表される人間愛に結びつける場合も[6], 個人の「寛容」的態度を全人類に拡大したものとして解釈しているが, これは啓蒙時代の西洋においても同様で, ヴォルテール（Voltaire, 1694-1778）の「寛容（tolérance）とは何であるか。それは人間愛（humanité）の領分である」[7]という言葉もその類である。つまり個々人の心中の問題として，日本語の「寛容」とキリスト教的寛容を同一視することで，前の内村のような解釈が成り立つというわけである。

だがこうした言説を鵜呑みにしてよいものだろうか。例えば，吉本隆明は前の「もし，だれかがあなたの右の頬を打つなら，ほかの頬をも向けてやりなさい」という一文を指して,「もしここに，寛容を読みとろうとするならば，原始キリスト教について何も理解していないのとおなじだ。これは寛容ではなく，底意地の悪い忍従の表情である」（傍点引用者）[8]と述べる。彼の主張は，ユダヤ教律法が右利きの人間を基準に作られたことを踏まえると得心がいく。古代ユダヤの世界で，相手を汚れた存在と蔑む場合，自らの手の柔軟な部分が接触しないよう手の甲で打つことがあった。そこで右利きの人間は相手の右の頬を手の甲で打つことになるのだが，このとき打たれる側の人間は左の頬を差し出して手のひらを使うよう仕向けることで，かえって打つ側を侮辱することができたのである[9]。こうして考えると,「山上の垂訓」から寛容を読み取る行為は，一歩間違えると「自分の思い込みや自分好みの考えを聖書からひねり出す（sua figmenta & placita ex Sacris Literis extorquere）」[10]という牽強付会になりかねない。こ

---

[3] バークレー , W.（松村あき子訳）『マタイ福音書（上）』，ヨルダン社，1967，173頁。

[4] Erasmus, D., *Querela Pacis undique gentium ejectae profligataeque,* Basel, Johannes Froben, 1517, p. 17（箕輪三郎訳『平和の訴え』，岩波書店，1961，41-42頁）．ここでエラスムスは,「主は〔中略〕悪に対して抵抗することさえ一切許されず，できれば邪しまな行為をしたものにも善をもって報い，人の不幸を願う者に対しても幸福を願うことを弟子たちに命じられたのです」と述べている。

[5] 浅見雅一「序章」，浅見雅一・野々瀬浩司編『キリスト教と寛容』，慶應義塾大学出版会，2019，2-7頁。

[6]『哲学事典』，平凡社，1971，1372-1373頁；林明弘「「右の頬を打たれたら」『マタイ』５，39についてのアウグスティヌスの解釈」,『川崎医療福祉学会誌』，第12巻，第２号，2002，241-245頁。なお厳密には，ガンディーが提唱したのは「非暴力・不服従」であって「無抵抗」ではない。

[7] Voltaire, *Dictionnaire philosophique portatif,* Londres（Genève）, 1764, p. 338（高橋安光訳『哲学辞典』，法政大学出版局，1988，386頁）.

[8] 吉本隆明『マチウ書試論・転向論』，講談社，1990，115頁。

[9] 田川建三『新約聖書　訳と註　第一巻』，作品社，2008，576頁。なお宗教における左右の両極性については，エルツ, R.（吉田禎吾ほか訳）『右手の優越』，筑摩書房，2001も参照。

[10] Spinoza, B., *Tractatus Theologico-Politicus and Tractatus Politicus,* edited by Kirk Watson, Independently

のことを肝に銘じつつ，寛容を真に問うべく，その系譜を簡潔に辿ってみたい。

例えば*Oxford Latin Dictionary*を繙いてみると，tolérance の語源となったtolerantiaには「苦痛や苦労を耐える能力，忍耐，我慢強さ」という意味しかないことがわかる。さらにその大本の語であるtoleroも「耐える」「忍ぶ」という意味[11]，つまりは「自身と相容れぬ意見・行為を我慢して許容する」ことを意味したのであって，初めから「他者の良心やその他の自由を認め」ていたのではない[12]。これは西洋における寛容の歴史的展開を振り返ると明快である。

元来，「飛びぬけて不寛容」[13]だったキリスト教はイエスの死後，ストア派的な寛容を否定しつつ古代ローマ帝国に普及し，さらに帝国の国教となってからは異端・異教への不寛容を一層強めるようになった。少なくとも西ヨーロッパにおいて，古代・中世を通じて，キリスト教における寛容は優位の多数派（正統）から劣位の少数派（異端）への認容を意味しており，必ずしも後者の自由・尊厳を認めていたわけではなかった。異端の認容は美徳ではなく，教団を破壊する悪徳とすら見做されていたが，これは同時代の寛容が個人的なものではなく，社会的問題として捉えられていたためである。しかしこの様相は16世紀の宗教改革期に変じた。この時期，カトリックとは異なるさまざまな宗派が登場した結果，一方では従来のように宗教的迫害が激化したものの，他方で異なる信仰・宗派の相互的容認として寛容が唱えられるようになり，アウクスブルクの宗教和議（1555）やナントの王令（1598）などと相まって，寛容は美徳として漸進し始めた。この流れを加速させたのが神と各個人との直接的関係を重んじるピューリタニズム諸派から生まれた「信教の自由（Liberté de religion）」の理念であったが，さらにこれを決定づけたのが『人間知性論（*An Essay Concerning Human Understanding,* 1689）』や『寛容に関する手紙（*Epistola de Tolerantia,* 1689）』などの著述で知られるジョン・ロック（John Locke, 1632–1704）であった。ここに近代的徳目としての寛容は定式化され，続く啓蒙時代の思想にも影響を及ぼしていく[14]。約言すれば，元々は消極的意味しかなかったキリスト教的寛容が16世紀に転換期を迎え，17世紀末に再定義されたことで西洋の寛容は基礎づけられた，ということになる。

しかし西洋において，近代以降の徳目としての寛容が，“tolero—tolerantia” に由来する諸語によって表現される必然性は，前に確認したラテン語の原義を思い起こしても，なかったはずである。例えば16世紀のフランス語を見てみても，tolérance ではなく，clémence, douceur, concorde などの語彙が「寛容」に相当していたことがわかる[15]。これは美徳へと転換し始めたはずの16世紀にあってなお，「寛容＝tolérance」という逐語的対応は成立していなかったことの証左である。よって一旦，両者の機械的な結合を解きほぐし，tolérance に糊塗されていない寛容を探究することは決して徒労ではないだろう。そこで本稿の主題として取り上げるのが，

---

published, 2021, p. 106（吉田量彦訳『神学・政治論（上）』，光文社，2014，302頁）.

[11] *Oxford Latin Dictionary,* edited by P. G. W. Glare, second edition, vol. 2, 2012, p. 2145.

[12] 下川潔『ジョン・ロックの自由主義政治哲学』，名古屋大学出版会，2000，巻末15頁。

[13] Zagorin, P., *How the Idea of Religious Toleration Came to the West,* Princeton University Press, 2003, p. 1.

[14]『大百科事典　3』, 平凡社，1984，1109–1110頁；廣松渉ほか編『哲学・思想事典』, 岩波書店，1998，297頁；大澤真幸ほか編『現代社会学事典』，弘文堂，2012，232頁。

[15] 和田光司「十六世紀フランスにおける寛容に関する諸概念について」，『聖学院大学論叢』，（上）第17巻，第3号，2005，127–134頁；（中）第18巻，第1号，2005，103–110頁；（下）第21巻，第2号，2009，125–139頁。

16世紀のプロテスタントにあって特異な存在であったセバスティアン・カステリヨン（Sébastien Castellion, 1515–1563）と，彼のフランス語訳聖書（1555）である。

ミカエル・セルウェトゥス（Michael Servetus, 1511頃–1553）処刑への抗議や，フランス国内の宗派対立を諫める『悩めるフランスに勧めること（*Conseil à la France désolée,* 1562）』といった著述により，後世では初期プロテスタントにおけるtoléranceの体現者と目されているカステリヨンだが，類稀な語学力をもって聖書翻訳にも励んでいた。一般に近代的なフランス語訳聖書の先駆は，ジャン・カルヴァン（Jean Calvin, 1509–1564）の従兄弟であったピエール・ロベール・オリヴェタン（Pierre Robert Olivétan, 1506–1538）によるヘブライ語・ギリシャ語原文からの翻訳聖書（1535）とされるが[16]，カステリヨンのフランス語訳はこの聖書より20年遅れているとはいえ，同様に原文からの翻訳[17]であるにも拘らず，専門領域外ではほとんど顧みられることがない。この聖書が1555年の初版，1572年の復刻版（ただし新約のみ）[18]，そして2005年の校訂版[19]の３回しか刊行されていないのとは対照的に，彼によって1551年に公刊されたラテン語訳聖書[20]が西ヨーロッパ各地で少なくとも13回にわたり版を重ね[21]，ロックからも評価されていたという事実もまた[22]，前者への関心の低さを浮き彫りにする。

他方，カステリヨンを専門的に扱う研究領域では，19世紀末より，彼のフランス語訳聖書は

---

[16] Olivétan, P. R., *La Bible qui est toute la sainte Escripture. En laquelle sont contenus le Vieil Testament & le Nouveau translatez en francoys. Le Vieil de l'ebrieu: & le Nouveau du grec, aussi deux amples tables, l'une pour l'interprétation des propres noms, l'autre en forme d'indice, pour trouver plusieurs sentences et matières,* Neuchâtel, Pierre de Vingle, 1535.

[17] *La Bible nouvellement translatée, avec la suite de l'histoire depuis le tems d'Esdras iusqu'aux Maccabées; e depuis les Maccabées iusqu'a Christ. Item avec des Annotacions sur les passages difficiles, par Sébastian Chateillon,* Bâle, Jehan Hervage, 1555.

[18] *Novum Iesu Christi Testamentum Latine & Gallice, Nova utriusque linguae elegantique versione,* Basel, Pietro Perna, 1572. 編纂したのはイタリア・シエナからの亡命者であったミーノ・チェルシ（Mino Celsi, 1514–1576）である。本文はカステリヨン訳のラテン語およびフランス語聖書を引き写した対訳本のような形で記されているが，後者にはチェルシが相当に手を加えたとみられる。

[19] Castellion, S., *La Bible 1555 nouvellement translatée,* préface: Pierre Gibert et Jacques Roubaud, notes et commentaires: Marie-Christine Gomez-Géraud, Paris, Bayard, 2005.

[20] *Biblia, interprete Sebastiano Castalione,* una cum ejusdem annotationibus, Basel, Johannes Oporin, 1551.

[21] Buisson, F., *Sébastien Castellion, sa vie et son œuvre, 1515–1563,* tome 2, Paris, Hachette, 1892, pp. 341–362.

[22] De Beer, E. S. ed., *The correspondence of John Locke,* vol. 4, Oxford, Clarendon Press, 1979, p. 744. ロックはオランダ人神学者フィリップ・ファン・リンボルフ（Philipp van Limborch, 1633–1712）と交わした1693年11月10日付書簡に，「あなたが仰るような，貴国でのカステリヨン訳聖書の出版計画を私は大変喜ばしく思いますし，この作品は間違いなくこちらの知識階級に好まれ，歓ばれることでありましょう」と記すなど，カステリヨンの聖書への好感を隠していない。さらに『教育に関する考察』でカステリヨンの学識について言及するロックは，その著作を何点か所持していた上，カステリヨン選集の出版を望んでいた節がある。これらの点については，De Beer, E. S., ed., op. cit., p. 780; Locke, J., *Some Thoughts Concerning Education,* London, A. and J. Churchill, 1693, pp. 104–105（服部知史訳『教育に関する考察』, 岩波書店，1967，125–126頁）；ロック, J.（クリバンスキー, R. 序・平野耿訳注）『寛容についての書簡』，朝日出版社，1971，xxxivを参照。

一定の関心を集めてきた。その例としてF. ビュイッソン，O. ドゥアン，J. A. ファン・アンデル，M. ボサール，H.-E. ケラー，C. スキュピアン＝デケンス，M.-C. ゴメ＝ジェロの各研究が挙げられる[23]。彼らは，カステリヨンが翻訳を行った意図を踏まえた上で，主に語彙的分析を通じて彼のフランス語訳聖書の特質を解明しようと試みてきた。その成果として，聖書翻訳に際しカステリヨンがidiots，すなわち平信徒たちへの普及を念頭に，彼らの実生活に根差した訳語を多く採用し，場合によっては造語すら行ったことが論証されている。確かに，学識に乏しい者も多かったであろう平信徒に向けて，難解な古典語ではなく，民衆に馴染んだ平易な語からなる聖書を提供しようとしたカステリヨンの教育的企画は看過すべきでない。

その一方で，先行研究では，彼の寛容思想とその翻訳聖書はまったくと言ってよいほど関連して論じられることがなかった。これは極めて不自然であると言わざるを得ない。確かにキリスト教の経典である聖書に「寛容」という語彙そのものが登場する回数は決して多くないものの，パウロ書簡をはじめ，それを想起させる表現は散見される。だからこそ冒頭に引用した内村のような言説が成り立つわけだが，先行研究が唱えるように，カステリヨンの翻訳聖書が語彙的な特質を持つのであれば，tolérance を用いない寛容の表現は十分に想定され得る。その場合にカステリヨンの寛容，ひいては彼にまつわる「寛容論者」像を改めて議論する必要性が生じ，また彼を思想史的に位置づけ直す余地すらも生じるはずだが，この問題は一向に考慮されていないのである。

以上のような先行研究の達成と課題を踏まえ，本稿ではカステリヨンのフランス語訳聖書を真正面に据え，同著の語彙的分析を基に，16世紀におけるフランス語の寛容の多様性を明らかにする。その際，彼が翻訳聖書に託した教育的目標を語彙・文章表現のみならず，構成の面からも看取できることを確認する。そして寛容を表す語彙の多様性という観点から，カステリヨンと寛容の関連の自明性を再考するとともに，彼の思想の歴史性および特異性について検討する。

2．カステリヨンの生涯と16世紀フランスの寛容

ところで，ここまでカステリヨンをさも著名人のように扱ってきたが，少なくともわが国にあってはその名が人口に膾炙しているとは言い難い。そこでまず，カステリヨンについての基

[23] Buisson, F., op. cit., tome 1, pp. 293-334; Douen, O., “La Bible française de Castalion”, Buisson, F., op. cit., tome 1, pp. 415-436; Van Andel, A. J., “La langue de Castellion dans sa Bible française”, Becker, B. éd., *Autour de Michel Servet et de Sébastien Castellion,* Haarlem, H. D. Tjeenk Willink, 1953, pp. 195-205; Bossard, M., “Le vocabulaire de la Bible française de Castellion（1555）”, *Études de Lettres: revue de la Faculté des lettres de l’Université de Lausanne,*, Bd. 2, 1959, pp. 61-88; Keller, H. E., “Castellios Übertragung der Bibel ins Französische”, *Romanische Forschungen,* Bd. 71, H. 3/4, 1959, pp. 383-403; Skupien Dekens, C., “La part de l’Esprit saint, la part de l’Écrivain. Variations stylistiques et variations syntaxiques dans la traduction française de la Bible de 1555”, Gomez-Géraud, M.-C. éd., *Sébastien Castellion: des Écritures à l’écriture,* Paris, Classiques Garnier, 2013, pp. 283-305; Gomez-Géraud, M.-C., “Savant pour les « idiots ». Quand Sébastien Castellion livrait la Bible en français”, *Castellion à Vandœuvres (1515-2015),* Genève, Droz, 2017, pp. 11-34.

本的な情報を共有することから始めたい。その後，カステリヨンと寛容の関係をより明確に把捉すべく，同時代のフランスの国内情勢と宗派対立の状況を確認し，本論に入る前の下準備とする。

(1) カステリヨンの生涯と著述[24]

カステリヨンは1515年，当時サヴォワ大公国に属していたサン・マルタン・ドュ・フレヌという村に，農民の子として生まれた。彼の少年期について仔細はほとんどわかっていないが，両親は学問的素養がなくとも敬虔なカトリックであり，特に父親は子どもたちに盗みや嘘を強く戒めたという。

1535年より，カステリヨンは当時フランス第二の都市として繁栄していたリヨンに遊学する。彼は古典語の習熟に努める一方で，三位一体学寮（Collège de la Trinité）に関係する多くの学者たちの知己を得たとされる。このとき学寮の中心的な存在であったバルテルミ・アノー（Barthélemy Aneau, 1510頃-1561）はカルヴァン，テオドール・ド・ベーズ（Théodore de Bèze, 1519-1605），ジャック・アミヨ（Jacques Amyot, 1513-1593）らと同じく，かつてメルヒオール・ヴォルマール（Melchior Volmar, 1497-1560）の下で古典語を学んだ人物である。カステリヨンが改革派へ接近した理由をこうした人的交流のうちに求めたくなるが，確たる証拠は何も残されていない。

とにかく，このリヨン時代に福音主義へ転向したと思しきカステリヨンは，1540年にカルヴァンを訪ねてストラスブールに向かう。両者は友好的な関係を結び，1541年にカルヴァンがジュネーヴへ帰還すると，カステリヨンは同地のリーヴ学寮（Collège de Rive）校長に推挙され，これを奉じた。そして彼は1543年より『聖対話篇（*Dialogi sacri*）』を順次公刊する。同著は古典ラテン語読本とプロテスタント的教養書という二つの側面を持つ教科書として設計された傑作で，ソルボンヌや教皇庁の妨害にあってもなお，西ヨーロッパで広くそして長きにわたって愛用された。こうした教育者としての任務と並行して，カステリヨンは既に新約聖書のフランス語訳を試みていた。しかし，その草稿に関するカルヴァンの修正案をカステリヨンが拒否したことで，両者の関係は微妙なものとなる。さらに校長職人事などをめぐりカルヴァンとの対立が先鋭化した結果，1545年にカステリヨンはジュネーヴを去ることとなった。

その後，彼はジュネーヴの北東約250㎞に位置するバーゼルへと向かう。当初，同地ではヨハンネス・オポーリン（Johannes Oporin, 1507-1568）の印刷所で校正係となったものの困窮し，生活のために漁労や耕作に従事するほか，流木を薪代わりにすることすらあったという[25]。た

---

[24] 以下，第２章(1)については，特に断りのない限り，Guggisberg, H. R., *Sebastian Castellio 1515-1563 : Humanist und Verteidiger der religiösen Toleranz im konfessionellen Zeitalter,* Göttingen, Vandenhoeck & Ruprecht, 1997（出村彰訳『セバスティアン・カステリョ』，新教出版社，2006）；出村彰『カステリョ』，清水書院，2015を参照。

[25] この様子を16世紀フランスの人文主義者モンテーニュ（Michel de Montaigne, 1533-1592）は，「イタリアではジリオ・グレゴーリオ・ジラルディ，ドイツではセバスチヤン・カステリヨンと，ふたりの碩学が，いわばわれわれの目の前で，ろくに食べるものもないような状況で，死に至ったということを聞いて，いまの時代をとても恥ずかしく思う」と評している。詳細はMontaigne, M., *Les Essais,* éd. établie par Jean Balsamo, Michel Magnien et Catherine Magnien-Simonin et M. Magnien, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 2007, p. 229（宮

だこの間，オポーリン協力の下，『モーセの建国（*Moses institutio reipublicae,* 1546）』や『シビュラ託宣（*Oracula Sibyllina,* 1546）』を刊行するなど，カステリヨンは自身の学問的成果を公表する機会を得ている。こうした出版活動を経た後，ジュネーヴ時代の試行を発展させる形で，彼はついに旧約・新約聖書の原典からの翻訳に取り組むようになり，この努力は1551年のラテン語訳，1555年のフランス語訳聖書となって結実する。またこれと前後して，1553年８月にはバーゼル大学のギリシャ語教授に就任したことで経済的危機を脱している。既述のスペイン人神学者ミカエル・セルウェトゥスがジュネーヴで火刑に処されたのは同年10月のことであった。

この処刑を正当化すべく，カルヴァンはにわかに『正統信仰の弁証（*Defensio orthodoxae fidei,* 1554）』を著す。これに反発したカステリヨンは，マルティヌス・ベリウス（Martinus Bellius）という偽名の下に，『異端は迫害さるべきか（*De haereticis, an sint persequendi,* 1554）』公表の中心的役割を担った。こうして，カステリヨンをはじめとするバーゼルと，カルヴァンやベーズを中心とするジュネーヴの間で論争が巻き起こった。この断続的な論争にあって一貫して異端処罰反対の論陣を張ったことで，カステリヨンは寛容論者として後世では語られることになる。後年発表された『悩めるフランスに勧めること』も彼の寛容論の一部といえよう。またこの間，ジュネーヴ側から批判に晒された自身の翻訳聖書のためにカステリヨンは弁明を行う一方で[26]，『ドイツ神学（*Theologia, Germanica,* 1556; *La Théologie germanique,* 1558）』や『キリストにならいて（*De imitando Christo,* 1562）』といった著述の翻訳を手がけていた。

しかし1563年12月，論争の最中にカステリヨンは突如としてこの世を去る。多年の精神的圧迫により健康を害していたことが死因とされるが，真相は不明である。このとき執筆中の『疑うすべについて（*De arte dubitandi,* 1563）』は未完となったが，同著は寛容論や人間観など，自身の思想を体系化しようという彼の試行錯誤の産物である。また死後出版となった『四つの対話篇（*Dialogi IIII,* 1578）』は予定説や自由意志論等，神学上の主要命題に関するカステリヨンの見解を知る貴重な手がかりとなっている。

(2) 16世紀フランスにおける寛容

前章で触れたように，1598年のナントの王令を例として，16世紀のフランスでも寛容は模索されていた。しかしその時代にあっては，toléranceというフランス語が市民権を得ていなかったこともまた事実である。そこでカステリヨンが生きた時代でもある16世紀における，フランスの寛容をめぐる動向についてさらに詳しく確認しておきたい。

ナントの王令が公布される以前の16世紀，フランス国内ではカトリックとプロテスタント（ユグノー）による熾烈な争いが繰り広げられていた。その渦中で開かれた1561年のポワシーの会談は唯一の例外的な和平工作である。この会談は，国内情勢の混乱に乗じた隣国スペインからの軍事介入を恐れたカトリーヌ・ド・メディシス（Catherine de Médicis, 1519–1589）やミシェル・ド・ロピタル（Michel de L'Hospital, 1505–1573）らが，フランスにおける新旧キリスト教の和解を目的として主催したものであった。会談には国内外から両陣営の重要人物が招かれ

下志朗訳『エセー　２』，白水社，2007，104–105頁）を参照。

[26] Castellion, S., *Sebastiani Castellionis defensio suarum translationum Bibliorum, & maxime Novi foederis,* Basel, Johannes Oporin, 1562.

たが，そのなかにはカルヴァン（当日は病気のため欠席）やベーズの名もあった。しかし結局和解は達成されず，むしろ双方の溝は深まるばかりであった[27]。

M. テュルケッティは，この破談の原因が「一致（concord）」と「寛容（tolerance）」の相克にあったと指摘する[28]。すなわちフランス国内の宗教的統一を重視するカトリックと，複数宗派の共存を求めるユグノーとの間では，そもそも寛容に対する見解が異なっていたというのである。とはいえフランスではユグノーとして蔑まれる改革派も，本拠ジュネーヴでは自派の一致を図るべくセルウェトゥスを処刑している。それはベーズ自身が述べるように，異端者は皆「分派論者，すなわち教会の一致と合意を乱す者（schismatiques, c'est-à-dire pertubateurs de la concorde & consentement de l'Église）」[29]と考えられたからである。つまり，16世紀フランスの情勢を見ると同世紀における寛容は絶対的な言説とはなっておらず，当時の改革派の言動が示すように己が立場に左右される流動的なものであったといえる。

このように考えると，教団の一致を重視する主流派とは無縁の生涯を送ったカステリヨンの思想を，異なる信仰・宗派の相互容認を基盤とする近代的寛容の先駆と位置づけるのは無理からぬことである。ロピタルやジャン・ボダン（Jean Bodin, 1530–1596）に代表され，信仰・教義の再統一に向けた暫定的措置としての寛容を唱える「ポリティーク（Politiques）」の一派と比較されるとき，複数宗派の共存を念頭に置くカステリヨンの寛容はさらに際立つであろう[30]。ポリティーク派の寛容に社会的な，カステリヨンの寛容に個人的な志向を認めることもできる。筆者も，後者の寛容論にこうした性質が皆無であると述べるつもりはない。ただ16世紀にあって定着していなかったtoléranceとは異なる語彙によって寛容が表現される際，それを無条件で近代的寛容に連結させるのではなく，一度それぞれの語彙を精査した上で，カステリヨンの思想に還元すべきだと考えるのである。

3．翻訳聖書の分析

前章までの予備知識を踏まえた上で，本章ではカステリヨンによるフランス語訳聖書の分析を行う。以下内容を3節に分け，初めに同著の書誌的背景を確認し，次いでその特質と構成から看取できる教育的目標設定について述べ，最後に「寛容」に相当するフランス語に着目し，各語彙の分析を進める。

---

[27] ネーミ, O.・ファースト, H.（千種堅訳）『カトリーヌ・ド・メディシス』，中央公論社，1982，107–118頁。

[28] Turchetti, M., "Religious Concord and Political Tolerance in Sixteenth- and Seventeenth- Century France", *The Sixteenth Century Journal,* vol. 22, no. 1, 1991, p. 17. また同論文の20–21頁にかけてテュルケッティは，「一致」を目指したエラスムスと「寛容」を追求したカステリヨンとを短絡的に結びつけることはできないとまで述べている。なお前掲の和田の論文（2009）では，135頁以下において，テュルケッティの「一致」に対する批評が行われている。

[29] Bèze, Th., *Traitté de l'authorité du magistrat en la punition des hérétiques, & du moyen d'y procéder,* Genève, Conrad Badius, p. 27.

[30] 佐々木毅『主権・抵抗権・寛容』，岩波書店，1973，51–64頁。

(1) 書誌的背景

聖書翻訳の歴史を区分する際，その「近代」はマルティン・ルター（Martin Luther, 1483–1546）による1522年のドイツ語訳聖書から始まるとされる。ただその先鞭をつけたのは，ルネサンス人文主義の代表的な知識人として名高いデジデリウス・エラスムス（Desiderius Erasmus Roterodamus, 1466–1536）であった。彼は1516年に『校訂新約聖書（*Novum Instrumentrum*）』を刊行しているが，その序文に次のような言葉を残している。

> あたかもキリストが少数の神学者によってかろうじて理解されうるように理解しにくく教えたかのように，あるいは，あたかもキリスト教の防衛がそれが知られないでいる点にかかっているかのように，聖書が民衆の言語に翻訳されて（divinas literas, in vulgi linguam transfusas），平信徒によって（ab idiotis）読まれるのを欲しない人々とは，わたしは全く意見を異にしています。〔中略〕またわたしは，これらの書がスコットランド人やイベリア人だけではなく，トルコ人やサラセン人にも読まれて認識されうるように，すべての民衆の言語に（in omnes omnium linguas）翻訳されるように願っています。[31]

序文中の「敬虔なる読者への呼びかけ（Paraclesis ad lectiorem pium）」に登場するこの記述は，広く民衆に聖書を普及させたいというエラスムスの思いを如実に表している。宗教改革以前の西ヨーロッパにおいて標準的に用いられていたのは「ウルガータ（editio vulgata）」と呼ばれるラテン語訳聖書であったが，このウルガータは，第37代ローマ教皇ダマスス１世（Damasus I, 304頃–384）の委嘱を受けた古代教父ヒエロニムス（Hieronymus, 346頃–419/420）が，それ以前のラテン語訳（Vetus Latina）に代わるものとして訳した（と一般に理解されている）聖書である。しかし，16世紀の時点ではウルガータもまた古いラテン語翻訳と化しており，人々はこれに代わる新たな聖書を求めるようになっていた。エラスムスの聖書はこうした時代の要請に応えようとするものであり，ウルガータの独占市場に風穴をあけることで，ルター訳ドイツ語聖書の呼び水となった。そして彼を端緒とした「聖書のみ（Sola Scriptura）」を掲げる宗教改革運動に様々な要因が重なり合うことで，聖書は数多の言語に翻訳されつつ民衆に普及し，後世では「永遠のベストセラー」と評されるに至るのである[32]。

ルターのドイツ語訳聖書から始まった近代聖書翻訳だが，フランス語訳としてはオリヴェタンがこれに相当する。彼に先んじて，既にルフェーヴル・デタープル（Jacques Lefèvre d'Étaples, 1450頃–1536）のフランス語訳聖書（旧約：1530，新約：1523）が存在していたものの，こちらはウルガータを大いに参照しているために，ヘブライ語・ギリシャ語原文からの最初の忠実な翻訳であるオリヴェタンの聖書と同列に語ることはできない。その出版地にちなんで「ヌシャテル聖書（Bible de Neuchâtel）」とも呼ばれるオリヴェタンの聖書に，優れた学者の集団でもあったジュネーヴの宗教改革者たちが改訂を繰り返すことで，フランス語における近代聖書翻訳の歴史が紡がれたのである。そしてベーズ主導の下，その集大成として作成されたのが1588年の「ジュネーヴ聖書（Bible de Genève）」であった。この聖書は近代聖書翻訳

---

[31] Erasmus, D., “Paraclesis ad lectiorem pium”, id., *Novum Instrumentrum,* Basel, Johannes Froben, 1516, np（金子晴勇訳『エラスムス神学著作集』，教文館，2016，231頁）.

[32] 金子前掲訳書，647–649頁；田川建三『書物としての新約聖書』，勁草書房，1997，491–520頁。

における最高傑作の一つとされ，ルターのドイツ語訳より重んじられることすらある[33]。

以上を近代聖書翻訳の「正史」とするならば，1555年にバーゼルで『新翻訳聖書。エズラからマカバイまで，マカバイからキリストまでの時代の物語の続編付。さらに難解な箇所の注釈付。セバスティアン・シャテイヨン訳（*La Bible nouvellement translatée, avec la suite de l'histoire depuis le tems d'Esdras iusqu'aux Maccabées; e depuis les Maccabées iusqu'a Christ. Item avec des Annotacions sur les passages difficiles, par Sébastian Chateillon*）』との名で出版されたカステリヨンのフランス語訳聖書は，そこから外れている。その要因を探るためにも，次節では，翻訳聖書の特質および構成について確認する。

(2) 翻訳聖書の特質とその構成

本稿冒頭で触れたように，先行研究では，学識に乏しい平信徒たちへの普及を目的としたことがカステリヨン訳フランス語聖書の特質だとされる。ただ，そもそもその望むところについては，カステリヨン自身が翻訳聖書の冒頭に記した「本翻訳に関する注意（Avertissement touchant cette translation）」で述べている。

> フランス語に関していえば，私は平信徒のことを（égard aux idiots）第一に考えた。そこで私は俗っぽくて単純な，最もわかり易い言葉（un langage commun et simple, et le plus entendible）をできる限りで用いた。そのため，ただの民衆（simple peuple）には理解されないギリシャ語やラテン語を使う代わりに，見つけられたらフランス語を用いた。見つけられなければ，必要に迫られてのことだが，フランス語に基づいて単語を作り，いつか耳にするとき，判別する助けとなるようにした。〔中略〕これは万人に，特に教養のある人々（gens de lettres）には受け容れられないことだろう（と私は思っている）。どうやら彼らはギリシャ語とラテン語に慣れ親しむあまり，一つの単語を聞くと，皆必ずやそれを理解してしまうようだ。だが平信徒を助け，救ってやらねばならない。何よりも彼らのために，彼らの言葉で書かれたものによって。[34]

ここには，まさに前に引用したエラスムス「敬虔なる読者への呼びかけ」にも通じる，カステリヨンの聖書翻訳の方針が明確に示されている。彼は，「信仰（foi），熱意（courage），意欲（vouloir）を持って講読に励む者は，学識，貧富，性別を問わず聖書を真に理解し，享受し，自らを日ごとに善くし，そして，どうしてそこに秘されていたのかと驚くような，天上の知恵という偉大な宝物を見出すことだろう」[35]という信念を有していた。この信念の下，特に無学な平信徒に向けて編まれたのがフランス語訳聖書であったが，「わかり易い（entendible）」言葉を追求して，「燔祭（holocauste）」をbrulage，「割礼を行う（circoncire）」をrongner，「公教要理を教える（catéchiser）」をenseignerと言い換えている。このほかにも随所に散見され

---

[33] 田川前掲書，535–537頁。

[34] Castellion, S., *La Bible 1555 nouvellement translatée,* p. 108. 以下，本稿におけるカステリヨン訳フランス語聖書の引用については，2005年に出版された校訂版を参照する。

[35] Ibid, p. 102.

る自由な語彙により[36]，カステリヨンは外来語・古代語の響きを大幅に取り去ることで，「初めて真にフランス語に訳された聖書」を完成させることに至ったのである[37]。

しかしカステリヨンの懸念したとおり，この聖書を酷評した教養人も存在した。無論，論敵カルヴァンをはじめとするジュネーヴの陣営もそこに含まれている。彼らはカステリヨン訳フランス語聖書の５年後，1560年に刊行した新約聖書の序文に次のように記している。

> 何か例が求められているならば，たくさん挙げるよりそのなかの一つを提示することにしたい。その例とはセバスティアン・カステリヨンによって広められた，聖書のラテン語訳とフランス語訳である。この男は恩知らず（ingratitude）で恥知らず（impudence）なこと，また正しき道ではなく，自身に従って人々に道を踏み外させようと骨を折っていることからこちらの教会ではよく知られているが，（これまでそうしてきたように）我々はその名を口にしないというだけでなく，移り気で不躾な人を喜ばせるために選ばれたサタンの手先（instrument choisi de Satan）として，こうした人物には用心せよとすべての信徒に教えていく。[38]

カルヴァンらジュネーヴ陣営は，低級な聖書翻訳がサタンの計略であると断じた上で，その代表例としてカステリヨン訳聖書を挙げている。引用部の後でも「恥知らずな向こう見ず（témérité effrontée）」，「聖書を軽んじ嘲った（se jouer de l'Ecriture sainte, et l'exposer en risée）」としてカステリヨンとその翻訳聖書を罵倒しているが，彼らの怒りはカステリヨンの平易な用語法に加えて，彼によって簡略化された文章表現にも向けられていたと考えられる[39]。他方でカトリックは，1551年の『禁書目録（*Index librorum prohibitorum*）』以来，カステリヨンの二つの翻訳聖書をいずれも異端と認定している[40]。こうした多方面からの否定的評価に加え，長大な頁数により本体価格が高騰したことで，カステリヨンのフランス語訳聖書は想定した読者層には届きにくくなってしまった。結果フランス語訳聖書は，民衆への普及というカステリヨンの望みを全うできず，「翻訳というよりも，フランス語で考えられ，書かれた書物」[41]という認識に止まらざるを得なかったのである[42]。

さて，構成についても触れておこう。彼のフランス語訳聖書は以下のように編まれている。

---

[36] Buisson, F., op. cit., tome 1, pp. 325–326.

[37] Douen, O., op. cit., pp. 434–436; Guggisberg, H. R., op. cit., p. 77（グッギスベルク前掲書，101頁）.

[38] Calvin, J. et al., "A tous fidèles Chrétiens", *Le Nouveau Testament, c'est à dire la nouvelle alliance de nostre Seigneur Jesus Christ,* Genève, Robert Estienne, 1560, p. 4; Guggisberg, H. R., op. cit., pp. 205–206（グッギスベルク前掲書，242–243頁）.

[39] Van Andel, A. J., op. cit., pp. 196–204.

[40] Guggisberg, H. R., "Castellio auf dem Index", *Archiv für Reformationsgeschichte,* vol. 83, 1992, pp. 125–127.

[41] Douen, O., op. cit., p. 436.

[42] Guggisberg, H. R., op. cit., 1997, p. 79（グッギスベルク前掲書，103頁）.

［表１］カステリヨン訳フランス語聖書の構成[43]

フランス語訳書名	日本語訳
旧約聖書	
Genèse	創世記
Exode	出エジプト記
Levitique	レビ記
Des Nombres	民数記
Deutéronome	申命記
Josué	ヨシュア記
Les Juges	士師記
Ruth	ルツ記
Des Rois quatre livres	列王記
Des Chroniques deux	歴代記
D'Esdras trois	エズラ記
Tobie	トビト記
Judith	ユディト記
Esther	エステル記
Job	ヨブ記
Le Sautier	詩篇
Les Proverbes	箴言
L'Ecclésiaste, c'est-à-dire le prêcheur	伝道の書（コヘレトの言葉）
Le Cantique des cantiques, c'est-à-dire la chanson des chansons	雅歌
La Sagesse de Solomon	ソロモンの知恵（知恵の書）
L'Ecclésiastique, c'est-à-dire le sermoneur, autrement la sagesse de Josué fils de Sirach	シラ書（集会の書）
（預言書）	
Esaie	イザヤ書
Jeremie	エレミヤ書
Les Lamentations de Jeremie	（エレミヤの）哀歌
L'Épître de Jeremie	エレミヤの手紙
Baruch	バルク書
Ezechiel	エゼキエル書
Daniel	ダニエル書
Osée	ホセア書
Joel	ヨエル書

[43] 2005年校訂版では目次（7-8頁）に誤りが確認できる。同著では「ローマ人への手紙」が2595頁から始まっているにも拘らず，目次では2621頁からの開始となっている。なお実際に後者の頁から始まっているのは「コリント人への第一の手紙」である。

Amos	アモス書
Abdie	オバデヤ書
Jonas	ヨナ書
Michée	ミカ書
Nahum	ナホム書
Habacuc	ハバクク書
Sophonie	ゼパニヤ書
Haggée	ハガイ書
Zacharie	ゼカリヤ書
Malachie	マラキ書
Le quatrième d'Esdras	第四エズラ記
La suite de Josèphe	ヨセフスによる続き
Des Macabées deux livres	マカバイ記一・二
La suite de Josèphe	ヨセフスによる続き
新約聖書	
Evangile selon S. Matthieu	マタイによる福音書
Selon S. Marc	マルコによる福音書
Selon S. Luc	ルカによる福音書
Selon S. Jehan	ヨハネによる福音書
Les Actes	使徒行伝
（パウロ書簡）	
Aux Romains une	ローマ人への手紙
Aux Corinthiens deux	コリント人への手紙
Aux Galates une	ガラテヤ人への手紙
Aux Ephésiens une	エペソ人への手紙
Aux Philippiens une	ピリピ人への手紙
Aux Colossiens une	コロサイ人への手紙
Aux Thessaloniciens deux	テサロニケ人への手紙
A Timothée deux	テモテへの手紙
A Tite une	テトスへの手紙
A Philémon une	ピレモンへの手紙
Épître de S. Jaques une	ヤコブの手紙
De S. Pierre deux	ペテロの手紙
De S. Jehan trois	ヨハネの手紙
De Judas une	ユダの手紙
Une aux Ebrieux	ヘブル人への手紙
L'Apocalypse	ヨハネの黙示録

現代のプロテスタント聖書と見比べると,「サムエル記」と「列王記」が一まとめになっていたり,「エレミヤの手紙」や「バルク書」が預言書に含まれていたり,「ダニエル書」から「ア

ザルヤの祈りと三人の若者の賛歌」が分けられていないなどの違いが散見されるが，最も注目すべきは「第四エズラ記」「マカバイ記一・二」のそれぞれに補遺のような形で，「ヨセフスによる続き」と称された記述が挿入されている点である。この記述はフラウィウス・ヨセフス（Flavius Josephus, 37–100頃）によって書かれ，ヨーロッパのキリスト教徒や知識人にあっては聖書の次に広く読まれたと言われる[44]『ユダヤ古代誌（*Antiquitates Judaicae,* 94/95）』を出典としている。実は，カステリヨンが1546年に出版した『モーセの建国』はこの『ユダヤ古代誌』第４巻の，第８章（第176節；以下，巻：章のみ略記）から末尾までをギリシャ・ラテン語対訳の形式で編んだものであったが，ここにきて彼はさらに，同著をそれ以外の箇所からも訳出し，自身の翻訳聖書に付け加えたのである[45]。「第四エズラ記」の直後には『ユダヤ古代誌』の11：7–8，12：1–5が，「マカバイ記一・二」の直後にはその13：8–16，14：1–16，15：1–11，16：1–11，17：1–13，18：1–3が付されているが，これは「聖書の歴史は不完全」[46]と見做した上で，その物語に連続性を持たせることにより学識のない平信徒の理解を助けようとする，カステリヨンの教育上の配慮である。たとえ広範な影響力を保持することがなかったとしても，カステリヨンの翻訳聖書は語彙・文章表現に加えて，構成の面においても，平信徒の教化に寄与すべく編纂されていた点は決して看過するべきでない。

(3)「寛容」の語彙分析

いよいよ語彙の分析を行うが，聖書という浩瀚な書物を闇雲に探っても，カステリヨンの寛容思想を闡明することは叶わないだろう。そこで日本語訳（新共同訳および口語訳を参照，二つの訳に共通する箇所については後者を引用）聖書における「寛容」の用例を拾い上げ，それらを日本語訳とカステリヨンによるフランス語訳とで見比べることにしたい（便宜上，聖書各巻の略記は英語に従った）。

［表２］日本語訳聖書の「寛容」とカステリヨン訳フランス語聖書の対応

	カステリヨン訳	日本語訳
Ps 86:5	Car toi, Seigneur, es bon et ***débonnaire***, enclin à bénignité envers tous ceux qui te réclament.	主よ，あなたは恵みふかく，**寛容**であって，／あなたに呼ばわるすべての者に／いつくしみを豊かに施されます。
Jer 15:15	Tu entends le cas, Seigneur : aie telle souvenance et soin de moi que tu me venges de mes persécuteurs. Ne me détruis pas en étant ***trop tardif à courroux*** : reconnais que c'est pour l'amour de toi que j'endure déshonneur.	主よ，あなたは知っておられます。わたしを覚え，わたしを顧みてください。わたしを迫害する者に，あだを返し，／あなたの**寛容**によって，／わたしを取り去らないでください。わたしがあなたのために，／はずかしめを受けるのを知ってください。

[44] ヨセフス, F.（秦剛平訳）『ユダヤ古代誌　１』，筑摩書房，1999，９頁。

[45] なお，1551年公刊のカステリヨンによるラテン語訳聖書に「ヨセフスによる続き」は付されていない。彼のラテン語訳聖書に付されるのは1554年版からのことである。

[46] Castellion, S., *La Bible 1555 nouvellement translatée,* p. 104.

2Ma 9:27	Car je me confie que, en suivant mon train, il se portera envers vous doucement et ***courtoisement.***	息子は，善意と**寛容**をもって，わたしの方針を受け継ぎ，あなたがたとうまくやっていけるものと，確信している。」
2Ma 10:4	Cela fait, ils prièrent le Seigneur à genoux, qu'il ne les laissât désormais plus tomber en un tel malheur, ains si quelque fois ils péchaient, qu'ils fussent ***doucement*** châtiés par lui-même, et non pas livrés à gens blasphémateurs et barbares.	これらのことを行った後，彼らは主に向かってひれ伏して言った。「主よ，わたしたちが二度とこのような災禍に陥らないように，また万一罪を犯すことがあっても，主御自身が**寛容**をもって矯正し，神を冒瀆する野蛮な異邦人の手に決して渡さないようにしてください。」
Wis 2:19	Examinons-le à beaux outrages et tourments, afin de connaître sa ***débonnaireté*** et juger de sa patience.	暴力と責め苦を加えて彼を試してみよう。その**寛容**ぶりを知るために，／悪への忍耐ぶりを試みるために。
Wis 12:18	Et toi, qui es maître de puissance, juges par ***raison*** et nous gouvernes en beaucoup nous épargnant, vu que tu as bien le pouvoir de faire ce que tu veux.	力を駆使されるあなたは，**寛容**をもって裁き，／大いなる慈悲をもってわたしたちを治められる。力を用いるのはいつでもお望みのまま。
Wis 12:20	Car si ceux qui étaient ennemis de tes enfants et méritaient la mort, tu les punis avec tant de délibération et ***avertissement***, en leur donnant temps et lieu pour se retirer de leur mauvaitié,	あなたの僕らの敵，死の罰に値する者たちに／これほどの配慮と**寛容**を示され，／悪から離れる時と方法を授けられたとするなら，
Sir 28:7	Souvienne-toi des commandements et ne sois point courroucé contre autrui ; souvienne-toi de l'alliance du Souverain et ***pardonne*** à autrui s'il s'est mépris contre toi.	掟を忘れず，隣人に対して怒りを抱くな。いと高き方の契約を忘れず，／他人のおちどには**寛容**であれ。
Sir 29:8	Toutefois à un souffreteux montre-toi ***serviable***, et ne délaye point de lui faire aumône.	けれども，貧しい人には**寛容**であれ。施しを延ばして相手を待たせてはならない。
Bar 2:27	après avoir employé envers nous, Seigneur, notre Dieu, ta grande ***bénignité***, et singulière miséricorde,	それでも，わたしたちの神なる主よ，あなたは限りない**寛容**と深い憐れみをわたしたちに示してくださいました。
Aza 0:19	ne nous mets pas à honte, ains nous traite selons ta grande ***bénignité*** et miséricorde,	我らを辱めず，／むしろ，**寛容**と豊かな憐れみをもって／我らに臨んでください。
Acts 24:4	Mais, afin que ne t'ennuie trop, je ne te prie de nous écouter un peu par ta ***courtoisie.***	さて，これ以上御迷惑にならないよう手短に申し上げます。御**寛容**をもってお聞きください。

Rom 2:4	Méprises-tu sa riche bonté, patience et ***attente***, sans savoir que la bonté de Dieu t'attire à t'amender ?	それとも，神の慈愛があなたを悔改めに導くことも知らないで，その慈愛と忍耐と**寛容**との富を軽んじるのか。
Rom 9:22	Et Dieu ? Si, en voulant montrer son courroux et faire connaître sa puissance, a enduré avec grande ***patience*** des vaisseaux de courroux, faits pour perdition ?	もし，神が怒りをあらわし，かつ，ご自身の力を知らせようと思われつつも，滅びることになっている怒りの器を，大いなる**寛容**をもって忍ばれたとすれば，
1Cor 13:4	Amour est ***patience*** et débonnaire ; amour n'a point envie ; elle n'est point légère ; elle ne s'enfle point ;	愛は**寛容**であり，愛は情深い。また，ねたむことをしない。愛は高ぶらない，誇らない。
2Cor 6:6	en chasteté, en science, en ***clémence***, en bonté, en Saint Esprit, en amour sans feintise,	真実と知識と**寛容**と，慈愛と聖霊と偽りのない愛と，
Gal 5:22	Mais le fruit de l'esprit est amour, joie, paix, clémence, ***bénignité***, bonté, foi	しかし，御霊の実は，愛，喜び，平和，**寛容**，慈愛，善意，忠実，
Eph 4:2	Avec toute humilité et débonnaireté, avec ***patience***, en supportant l'un l'autre par amour,	できる限り謙虚で，かつ柔和であり，**寛容**を示し，愛をもって互に忍びあい，
Phil 4:5	Soyez si ***courtois*** que chacun le connaaisse. Le Seigneur est près.	あなたがたの**寛容**を，みんなの人に示しなさい。主は近い。
Col 3:12	Vêtez donc（comme élus de Dieu, saints et bien-aimés）entrailles de compassion, bénignité, humilité, courtoisie, ***patience***,	だから，あなたがたは，神に選ばれた者，聖なる，愛されている者であるから，あわれみの心，慈愛，謙そん，柔和，**寛容**を身に着けなさい。
1Thess 5:14	d'avantage, nous vous prions, remontrez aux débauchés, consolez les découragés, soulagez les faibles, soyez ***cléments*** envers tous.	兄弟たちよ。あなたがたにお勧めする。怠惰な者を戒め，小心な者を励まし，弱い者を助け，すべての人に対して**寛容**でありなさい。
1Tim 1:16	Mais pour ce m'a-t-il été fait miséricorde, afin que, en moi pour le premier, Jesus Christ montrât une souveraine ***clémence***, pour donner exemple à ceux aui devaient croire en lui pour avoir vie éternelle.	しかし，わたしがあわれみをこうむったのは，キリスト・イエスが，まずわたしに対して限りない**寛容**を示し，そして，わたしが今後，彼を信じて永遠のいのちを受ける者の模範となるためである。
1Tim 3:3	Non point ivrogne, ni batteur, ni pinsemaille, mais ***raisonnable***, sans noise, sans avarice	酒を好まず，乱暴でなく，**寛容**であって，人と争わず，金に淡泊で，
2Tim 3:10	Or toi, tu as poursuivi ma doctrine, conversation, entreprise, foi, ***clémence***, amour, patience,	しかしあなたは，わたしの教，歩み，こころざし，信仰，**寛容**，愛，忍耐，

2Tim 4:2	que tu aies à prêcher la parole ; presse en temps, reprends, tance, exhorte avec toute ***clémence*** et doctrine.	御言を宣べ伝えなさい。時が良くても悪くても，それを励み，あくまでも**寛容**な心でよく教えて，責め，戒め，勧めなさい。
Tit 3:2	Ne médire de personne, n'être point noiseux, ains ***débonnaires***, montrant toute douceur envers un chacun.	だれをもそしらず，争わず，**寛容**であって，すべての人に対してどこまでも柔和な態度を示すべきことを，思い出させなさい。
Jas 3:17	Mais la sagesse d'en haut premièrement elle est nette, puis paisible, ***raisonnable***, serviable, pleine de miséricorde et de bons fruits, sans avoir égard à autre qu'à la vérité, et sans feintise.	しかし上からの知恵は，第一に清く，次に平和，**寛容**，温順であり，あわれみと良い実とに満ち，かたより見ず，偽りがない。
1Pet 2:18	Vous, serviteurs, obéissez avec une grande crainte à vos maîtres, non seulement aux bons et ***raisonnables***, mais aussi aux déraisonnables.	僕たる者よ。心からのおそれをもって，主人に仕えなさい。善良で**寛容**な主人だけにでなく，気むずかしい主人にも，そうしなさい。
1Pet 3:20	enclos en charter, qui jadis n'avaient pas cru, quand une fois la ***patience*** de Dieu attendait au temps de Noé, lorsque l'arche se faisait, en laquelle peu, c'est-à-dire huit personnes, furent sauvées en l'eau.	これらの霊というのは，むかしノアの箱舟が造られていた間，神が**寛容**をもって待っておられたのに従わなかった者どものことである。その箱舟に乗り込み，水を経て救われたのは，わずかに八名だけであった。
2Pet 3:15	et tenez pour salut ***l'attente*** de notre Seigneur, ainsi que notre cher frère Paul, par la sagesse qui lui a été donnée, vous a écrit,	また，わたしたちの主の**寛容**は救のためであると思いなさい。このことは，わたしたちの愛する兄弟パウロが，彼に与えられた知恵によって，あなたがたに書きおくったとおりである。

日本語訳における「寛容」の用例は30を数える。これに対応するカステリヨン訳フランス聖書の語彙を整理すると，その内訳はpatienceが５件，clémence（clémentsを含む）が５件，raison（およびraisonnable）が４件，débonnaireté（およびdébonnaire）が３件，courtoisie（courtois, courtoisementと合わせて）が３件，bénignitéが３件，attenteが２件，そしてtrop tardif à courroux, doucement, avertissement, pardonne, serviableがそれぞれ１件となる。「寛容」に相当する語としてtoléranceが用いられていない事実を今一度踏まえつつ，以上の語彙について分析を行うことにしたい。

まず目を引くのが５度ずつ用いられているpatienceと，clémence系の語彙である。リトレ（Émile Littré, 1801–1881）の『フランス語辞典（*Dictionnaire de la langue française,* 1863–1877；以下『リトレ』と略記)』を繙いてみると，前者の第一義には “Vertu qui fait supporter avec modération et sans murmure” とある[47]。ロベールなどの仏仏辞典を確認しても大同小異

[47] Littré, É., *Dictionnaire de la langue française contenant,* tome 3, Paris, Hachette, 1873, pp. 1005–1006. なおフ

「（じっと）耐えること」が基本的な意であると見做してよく[48]，tolérance の原義，あるいは冒頭に引用した内村の「黙許」という言葉を想起させる。また表 2 に掲げたカステリヨンの用例において，patience が「神」や「愛」という言葉と結びついているのは偶然ではない。なぜならそこには，上位者から下位者に向けられたある種の憐憫の情が内在しているからである。

他方，後者については “Vertu qui, chez une personne puissante, consiste à pardonner les offenses, et à adoucir les châtiments” とあり[49]，「寛大であること」を意味することがわかる。ただカステリヨンの翻訳からもわかるように，「力のあるもの」が行為の主体として想定されていることから，ここでもやはり上位者から下位者への垂直的な，恩恵の如き含意が存する点は看過すべきでない。

次に 4 度用いられている raison 系の語彙だが，再び『リトレ』を確認すると，そもそも名詞 raison は非常に多義的な語であることがわかる。第一義の “Faculté par laquelle l’homme connaît, juge et se conduit” はいわゆる「認識，判断，行動能力」を指し[50]，raisonnable はこの力を備えた人を意味する。カステリヨンのフランス語訳聖書において典型的なのは「テモテへの第一の手紙」（３：３）で，酩酊や暴力の対義としての「理知（的な性質）」を表現しており，また他の用例を踏まえると，「善悪を判別し，善を選んで行う」といった，『リトレ』の第四義も読み取ることができる[51]。また彼の神学者としての側面を考慮すると，アカデミー・フランセーズによる 1694 年の辞典（以下 *AF1694* と略記）にあるような「（動物とは異なり）神から人間にのみ賦与された力」[52]という raison の含意も押さえておく必要があるだろう。こうして考えると寛容とは没交渉のように思えるが，『リトレ』の raisonnable には “Qui supporte avec resignation”，すなわち「（不幸などを）甘受する」という意味が記されており[53]，前の patience に似た「耐えること」の意を窺わせる。

次いで，３度ずつ登場する débonnaireté 系および courtoisie 系の語彙，bénignité に目を向けてみると，まず débonnaireté は “Qualité du débonnaire” であると『リトレ』にある[54]。そこで引き続き形容詞 débonnaire を見てみると，“Qui joint douceur et bonté. Une humeur débonnaire” で，つまりは「温厚な（人，状態）」を指す[55]。カステリヨン訳聖書の用例においてその主体は神あるいは人間であるが，上下関係が常に意識されているわけでない。彼の用法に一貫性を見出すことは難しいが，「耐えること」を意味していると見做せる「知恵の書」（２：19）の例には注目すべきである。

ランス語 patience の最古の用例は 12 世紀に著された *Libri Psalmorum Versio Antiqua Gallica (Psautier d’Oxford)* 中のものである。同著はアングロノルマン語で書かれた聖書「詩篇」で，patience の登場箇所は日本語（口語）訳の 71：５に相当する。

[48] https://dictionnaire.lerobert.com/definition/patience（2022年９月11日閲覧）

[49] Littré, É., op. cit., tome 1, p. 641.

[50] Littré, É., op. cit., tome 4, p. 1455.

[51] Ibid, p. 1455. “Le bon usage de la faculté de raison, bon sens, justesse d’esprit, sagesse.”

[52] *Le dictionnaire de l’Académie françoise, dédié au Roy,* tome 2, Paris, J. B. Coignard, pp. 369–370.

[53] Littré, É., op. cit., tome 4, p. 1458.

[54] Littré, É., op. cit., tome 2, p. 969.

[55] Ibid.『リトレ』によれば，de, bon, aire から構成された語であるという。

またcourtoisieは『リトレ』の第一義に “Civilité relevée d'élégance ou de générosité” とある[56]。語源である形容詞courtoisと見比べてみても[57]，その意味するところは主に「(厚意・敬意を含んだ) 丁重さ，礼儀正しさ」である。これらの語が「宮廷」を意味するcourを語源として，中世の騎士道精神と結びついていることも念頭に置くべきであろう[58]。またカステリヨンの翻訳聖書を読む限り，courtoisie系の語彙が登場する「使徒行伝」(24：4)，「ピリピ人への手紙」(4：5)，「第二マカバイ記」(9：27) では話し手と聞き手の関係を同格・対等と見做すことができ，これまで見てきた他の語彙に比して「耐えること」，あるいは垂直的な力関係の含意が弱いことが窺える。

そしてbénignitéは，「病気の軽症」という意味を持つものの，カステリヨンの用例では “Disposition du cœur par laquelle on se plaît à faire du bien à autrui” を表しており[59]，3件いずれにおいても「御霊 (l'esprit)」や「神 (Dieu)」，「主 (Seigneur)」といった，人間よりも上位の存在の性質を形容している点は興味深い。また後述するが，『リトレ』と*AF1694*のいずれにおいても，bénignitéがdouceurおよびhumanitéの類義語とされている点に留意しておきたい[60]。

ところで，2度用いられているattenteはどのような意味を有するのだろうか。動詞attendreから派生した名詞であるこの語の第一義は，“Action d'attendre ou temps pendant lequel on est à attendre” と『リトレ』あるように「待つこと，待ち時間」である[61]。聖書においては，いずれの用例でも「神」または「主」がその主体である。そしてそれは，人間の「悔い改め (s'amender)」と「救済 (salut)」のためである。ここから論理を展開させ，神あるいは主が待つ以上，人間もまた待たなくてはならないと，カステリヨンは他の著述においても一貫して唱える[62]。故に，漫然と待機するのではなく何かしら希望を持って待ち望むというカステリヨ

---

[56] Littré, É., op. cit., tome 1, p. 868. なお「寛容，寛大」といった日本語訳が充てられ得るgénérositéだが，西洋中世まではtoléranceと同じく，道徳上の積極的意味は希薄であったという。このgénérositéの変化に一役買ったのがルネ・デカルト (René Descartes, 1596–1650) で，彼は『情念論 (*Les passions de l'ame,* 1649)』において倫理的徳を論じるに際し，スコラ哲学的なmagnanimité (magnanimitas) をあえて避け，それに代わる語としてgénérositéを用いたとされる。詳細は，野田又夫訳『方法序説・情念論』，中央公論新社，2019，155，241–242，340–341頁；松根伸治「トマスにおける《高邁》magnanimitasの位置づけ」，『南山神学』，第33号，2010，193頁を参照。

[57] Ibid, pp. 867–868.

[58] Ibid; *Thresor de la langue francoyse tant ancienne que moderne,* Paris, D. Douceur, 1606, pp. 161–162. なお17世紀のフランス人劇作家ジャン・メレ (Jean Mairet, 1604–1686) の悲劇『ソフォニスブ (*La Sophonisbe,* 1634年初演)』の第3幕・第4場には “Où votre courtoisie, ô vainqueur débonnaire,” という，courtoisieとdébonnaireが同時に用いられた台詞が存在する。

[59] Littré, É., op. cit., tome 1, p. 328.

[60] Ibid; *Le dictionnaire de l'Académie françoise,* tome 1, p. 97.

[61] Littré, É., op. cit., tome 1, p. 233.

[62] Châteillon, S., *De haereticis, an sint persequendi, et omnino quomodo sit cum eis agendum, Doctorum virorum tum veterum, tum recentiorum sententiae,* Basel, Johannes Oporin, 1554, pp. 4–5 (出村彰訳「異端は迫害さるべきか」，『宗教改革著作集　第10巻』，教文館，1997年，40頁)．カステリヨンによる「待つ」ことの

ンの寛容は，この翻訳聖書においてはattenteの含意に看取できるのである[63]。

ここからは，カステリヨンによって１度ずつ用いられている語彙について確認したい。まず“trop tardif à courroux”は，逐語的には「あまりに（trop）」，「遅い（tardif）」，「怒りに（à courroux）」と読むことができる[64]。この「怒り」は「エレミヤ書」（15：15）では信徒から見た敵対者へ向けられるもので，神に対し，怒りの感情を鈍らせることなく，速やかに報復を行うよう催促している。とどのつまり，先述した神の崇高なattenteもあまりに長いと，かえって信徒に不利益をもたらしかねないというわけである。

他方，「第二マカバイ記」（10： 4）で用いられている副詞doucementは，raisonほどではないにせよ多義的である。例えば『リトレ』には「ゆるやかに（lentement）」，「ひっそりと（sans bruit）」といった意も掲載されているが，その主たる意味は “D’une manière douce, délicate, légère”，すなわち「douceな，慎重な，あっさりとしたやり方で」というものである[65]。ではdouce（doux）という形容詞は何かといえば，その本質は「心地よいさま（agréable）」にあり，これが味を形容すれば「甘い」，人を形容すれば「優しい」といった意味になる。ちなみに，clémenceを説明する際に登場したadoucirはdouxの派生語である[66]。また『リトレ』の第七義には “Qui a de la bénignité, de l’indulgence, de l’humanité” とある[67]。前に軽く触れたように，bénignitéとdoux（doucuer）は「人間愛，思いやり（humanité）」に類する語彙である。humanitéには「人間性（nature humaine）」の意もあるが[68]，カステリヨンはいずれも人間を形容する語として用いていない。ラテン語訳聖書ではclementerという語が充てられていること[69]，そして前のフランス語clémenceの意味を踏まえると，彼はフランス語訳においてもdoucementを主（上位者）から人間（下位者）への垂直的関係の下に捉えている。

さてavertissementであるが，カステリヨンによるこの語の用例と寛容が結びつく様は些か奇妙である。というのも『リトレ』や他の仏仏辞典，あるいは仏和辞典等を確認しても，この語は「警告，忠告」や「知らせ」，あるいは「前書き」くらいの意味しか載っていないからである。カステリヨンのラテン語訳聖書における対応語もadmonitioであり[70]，やはり寛容との関係を見出すことは難しい。

では「シラ書」（28： 7）で用いられている動詞pardonne（pardonner）はというと，『リトレ』

意義は，『異端は迫害さるべきか』以外に『ドイツ神学』翻訳や『疑うすべについて』等，他の著述を執筆する際にも一貫して唱えられている。詳細については，拙稿「セバスティアン・カステリヨンにおける寛容と良心」（教育史学会『日本の教育史学』，第64巻，2021，48-60頁）および「セバスティアン・カステリヨンと『ドイツ神学』」（仙台ゲーテ自然学研究会『プロテウス』，第21号，2022，39-71頁）を参照。

[63] Littré, É., op. cit., tome 1, p. 233; *Le dictionnaire de l’Académie françoise,* tome 1, p. 64.

[64] Littré, É., op. cit., tome 1, p. 861. ほかに「怒り」を表すフランス語としてcolèreが存在するが，『リトレ』によるとcourrouxの方が文語的で硬い語であるという。

[65] Littré, É., op. cit., tome 2, p. 1230.

[66] *Le dictionnaire de l’Académie françoise,* tome 1, p. 348

[67] Littré, É., op. cit., tome 2, pp. 1235-1236.

[68] Ibid, p. 2063; *Le dictionnaire de l’Académie françoise,* tome 1, pp. 567-568.

[69] Castalio, S., *Biblia,* p. 563.

[70] Ibid, p. 170.

では「罰，報いを免ずる」が基本の意であり，また第二義ではtolérerと類義であると説明されている[71]。さらに*AF1694*にはキリスト教特有の用例として，「わたしたちに負債のある者をゆるしましたように，わたしたちの負債をもおゆるしください」[72]や「父よ，彼らをおゆるしください。彼らは何をしているのか，わからずにいるのです」[73]といった聖句が挙げられているが，同辞典に従えば負債とは「キリスト教的罪（offenses）」を指す[74]。これらの記述を総合すると，少なくともカステリヨンはpardonnerを上位者の憐れみに基づく赦しの意で用いていたと解釈できる。

最後のserviableは，『リトレ』では “Qui aime à rendre service”[75]，*AF1694*では “Qui est prompt, & zelé à servir, à rendre de bons offices”[76]とあるように進んで「奉仕」する意である。この語彙が用いられているのは「シラ書」（29：8）の一節で，そこでは貧しい者へ施しを行うよう命じられているが，この記述は「求める者には与え，借りようとする者を断るな。」という「マタイによる福音書」（5：42）を想起させる。これらを踏まえ，serviableをある種の隣人愛，もしくはラテン語obsequiosusに相当する従順と見做すことも可能であるが[77]，「マタイによる福音書」（5：39）に対して吉本が指摘したような底意地の悪さ，倒錯感情がそこにないとも言い切れない。とはいえ，このたった一つの用例では，カステリヨンの真意は判然としない。

ここまでの分析結果を整理しよう。日本語訳で30回登場する「寛容」という語は，カステリヨンのフランス語訳聖書においてpatience：5回，clémence（cléments）：5回，raison（raisonnable）：4回，débonnaireté（débonnaire）：3回，courtoisie（courtois, courtoisement）：3回，bénignité：3回，attente：2回，そしてtrop tardif à courroux, doucement, avertissement, pardonne（i.e. pardoner），serviable：各1回の語彙により表されている。このうち「耐えること」を意味するpatienceを筆頭に，clémence系，raison系，bénignité，attente，doucement，pardonnerの計24件の用例には，優位者から劣位者への垂直的含意を見出すことができる。またdébonnaireté系の語彙も，場合によってはこの意味を含んでいると考えられる。こうした語彙が用いられたという事実は，今日理解される意味での「寛容」と往時の「寛容」が多少なりとも隔絶していることの証左であり，カステリヨンが16世紀の軛から完全に脱するには至っていないことをも示す。よって彼の表す寛容と近現代的な寛容とを同一視することには慎重になるべきである。

他方，カステリヨンの用例において，courtoisie系の語彙は「耐えること」，あるいは垂直的な力関係から自由な「寛容」を表すと考えられる。またattente，さらにtrop tardif à courroux と，わずか3件ではあるが時間的な表現が用いられている点も注目に値する。16世紀における寛容論争の端緒を開いた『異端は迫害さるべきか』から絶筆『疑うすべについて』に至るまで一貫する，彼の「待つこと」への期待はこれらの語彙に表れていると解することができるから

---

[71] Littré, É., op. cit., tome 3, p. 946.

[72]「マタイによる福音書」6：12。

[73]「ルカによる福音書」23：34。

[74] *Le dictionnaire de l'Académie françoise,* tome 2, p. 178.

[75] Littré, É., op. cit., tome 4, p. 1919.

[76] *Le dictionnaire de l'Académie françoise,* tome 2, p. 469.

[77] *Thresor de la langue francoyse tant ancienne que moderne,* p. 593.

である。個々人の水平的人間関係や，時間の経過と人間の改悛・救済との相関を想起させるこれらの語彙には，カステリヨン思想が有する近代性の萌芽を看取することができる。ただし，カステリヨンの寛容思想をさらに精緻に論ずるには，avertissementやserviableが用いられた意図を含めたさらなる語彙の分析，そして他の著述の追究が必須である。

4．小括と今後の展望

以上，カステリヨン訳フランス語聖書の語彙を「寛容」の用例に着目して分析してきた。その結果を，本稿全体の議論を含めてまとめることにしたい。

近現代の思考様式に照らし合わせると，「山上の垂訓」を典型として，キリスト教からは個人的態度に基づく寛容を読み取ることができる。その際，当然のように用いられるのがラテン語tolerantiaに由来する語であるが，この語は元来「苦痛や苦労を耐える能力」を意味したため，劣位の少数派，すなわち異端的な他者に対し「自身と相容れぬ意見・行為を我慢して許容」するのがtolerantiaとしての「寛容」であった。これには，寛容が社会的問題として捉えられていたことも関連する。一方，この語に「他者の良心やその他の自由を認める」という意が生じ始めるのは16世紀西ヨーロッパの宗教改革期以降のことで，その定式化に至っては，次世紀のピューリタニズムの伸張やロックの思想を待たなければならなかった。事実，16世紀のフランスにおいても「寛容＝tolérance」は成り立たず，優位者にとっては国家あるいは教団の一致の方が重要であった。

この16世紀にあって早くも寛容を体現したと目されるのがスイスで活動したカステリヨンであるが，彼のフランス語訳聖書に着目するとその実像に些か疑問が生じてくる。先行研究および彼自身が認めるように語彙，文章表現，さらにはその構成に至るまで，学識に乏しい平信徒の理解を助けるという教育的配慮の下にあったカステリヨンのフランス語訳聖書であるが，「寛容」の用例を分析すると，少なくとも24/30件で優位者から劣位者への垂直的含意を見出すことができる。この事実から近現代的な意味での「寛容」ではなく，あくまで「我慢して許容する」意味での，つまりは社会的な問題としての「寛容」をカステリヨンは想定していたことが浮かび上がってくる。同時にこれは，彼が16世紀の人間の思考様式を有していたというある種当然の帰結であるものの，故にこそカステリヨンを今日理解されるような「寛容」の先駆と見做すには慎重を期すべきである。

とはいえ，彼の翻訳聖書の用例に近代的志向が全くないというわけでもない。優位と劣位の垂直的含意の弱いcourtoisie系の語彙のほか，時間を見据えた「待つ（attente）」や「遅い（tardif）」がその例である。前者は個々人の水平的関係を，後者は時間の経過に応じた人間の改悛と救済を想起させ，人類の平等や完成可能性といった思想への発展も窺わせる。ただ，最終的な評価を下すにはさらなる語彙の分析と，カステリヨンの著述の包括的な検討が不可欠である。

さて，カステリヨンのフランス語訳聖書を介した寛容の分析・検討にあって本稿の成果は微々たるものであり，課題は依然として山積している。以下，そのなかでも特に急を要する4点について述べ，本稿の結びとする。

第一の課題は，カステリヨン訳ラテン語聖書の徹底的な分析・検討である。本稿でも述べたように，カステリヨンは1555年のフランス語訳聖書刊行に先んじて，1551年にラテン語訳聖書

を完成させている。初版には付されていなかったものの，1554年版からはヨセフスの『ユダヤ古代誌』の抜粋を伴うようになったことで，ラテン語訳とフランス語訳聖書は同じ構成となった。両者を比較することで，今回検討したフランス語訳聖書の「寛容」の語彙や，カステリヨン研究にさらなる見地をもたらすことができると考えられるが，本稿にはほとんど盛り込むことが叶わなかった。

第二は，聖書における「寛容」語彙の遡求である。今回検討したフランス語訳聖書における30の「寛容」の用例は大きく分けると12の語彙によって表されており，ある程度の多様性を有する。そこからカステリヨンの寛容観を探ったわけだが，一部のdébonnaireté系の語彙のほか，avertissementやserviableの用例についてはその意図を闡明することができていない。そこで彼のラテン語訳に加えてウルガータや七十人訳，果てはヘブライ語原典まで聖書を確認し，「寛容」の語彙・用例を検討することが肝要である。なお現時点では，七十人訳聖書の「寛容」についてἐπιείκειά系，あるいはμακροθυμία系の語彙によりほとんど一貫して表されることが判明している。

第三は，第二の課題から派生したもので，聖書における「寛容」のさらなる分析である。今回カステリヨンのフランス語訳聖書を分析するにあたって，日本語訳聖書の「寛容」を基にしたが，これで聖書中の「寛容」を網羅したと考えるのは早計に過ぎるというものであろう。そこで次段階の作業として，前の30の用例を古典語にまで遡求した上で「寛容」の語彙を特定した後，聖書全文を改めて確認する必要がある。これにより新たな「寛容」，ひいてはカステリヨンと寛容の関連についてのさらなる示唆を得ることができると予想される。

そして最後の課題は，日本語としての「寛容」の闡明である。本稿ではあくまでカステリヨンの寛容を論じるという目的から，「寛容」という日本語の内奥についてあえて論述を避けてきた。既に確認したように，西洋思想における寛容はtolerantia系統の語で表現される必然性はなかったが[78]，日本語についても「他者を咎めない」「他者をゆるす」「他者を受け容れる」意を「寛容」で表す謂れはなかったはずである。瞥見の限り，日本語の寛容の由来は『荀子』まで少なくとも遡ることができ[79]，また明治期の翻訳語としては中村正直（1832–1891）の『自由之理（1872)』が初出となるが，これらの「寛容」が同義である保証はまるでない。さらには，どれだけ西洋のtoléranceに踏み込んだとしても，「心の広さ・包容力」を核とする日本的な思想[80]を「寛容」に読み込む限り，その断層は一向に解消できない恐れすらある。これを自覚せぬままに，『広辞苑』やその他国語辞典の定義を西洋的寛容に敷衍すれば，吉本やスピノザ（Baruch de Spinoza, 1632–1677）の禁戒を犯すことになる。

［付記］本稿はJSPS 科研費21J10778の助成を受けたものである。

---

78 例えば，河野雄一はエラスムスのtolerantiaを「寛容」，clementiaを「寛恕」と訳し分ける工夫を凝らしている。詳細は同『エラスムスの思想世界』，知泉書館，2017を参照。

79 金谷治訳注『荀子（上)』，岩波書店，1961，39頁。第３巻「不苟篇」に「君子能則寛容易直以開道人」とあるが，これは「君子は能あれば則ち寛容易直にして人を開き道びき，（君子は能力あれば寛容平正で他人を啓発指導し，）」という意味である。また前漢の頃に著された『韓詩外伝』の第８巻には「徳行寛容，而守之以恭」とある。

80 下川前掲書，巻末14–15頁。

An attempt to analyze the French translation of the Bible by Sebastian Castellio: A diversity of tolerance

KOYAMA Sena

Key Words

Sebastian Castellio, French, the Bible, tolerance, vertical relationship of people, expectation of human perfectibility

Abstract

In this paper, we attempt to reveal the diversity of tolerance in sixteenth-century French, analyzing a French translation of the Bible by Sebastian Castellio. And then, we consider his historicity and peculiarity by rethinking his concept of tolerance.

People often say *tolerance* which means not being petty or showing their broad-mindedness, and assume the horizontal relationship among us. Christians also say that Christianity has tolerance based on humanity, citing the Sermon on the Mount and other parts of the Bible. In that way, they regard it as an issue within the individual mind. However, this is bizarre because tolerance was a kind of vice which menaced community or society until the sixteenth century. And it was in the seventeenth century that it turned into a virtue. Originally, tolerance came from Latin *tolerantia* (*tolero*) in the sense of bearing, supporting, or endurance, but not showing one's broad-mindedness etc. So its essence was in the vertical relationship between strong major bearing orthodox and weak minor liberal heresies.

Sebastian Castellio was a sixteenth-century Christian theologian living in Basel, Switzerland. He is known as a defender of tolerance, protesting for the execution of Michael Servetus by the Genevan authority, including John Calvin and Theodore Beza. But Castellio was also a translator of the Holy Scriptures, and he made it into Latin and French from the original text. This time we focus on the latter version and analyze his intention of it and his expressions of tolerance.

In conclusion, although his translation was so instructive in its terms, sentences, or composition that aimed to help the ignorant understand the Bible, Castellio assumed the vertical relationship between powerful and powerless people almost whenever he expressed tolerance. And he didn't use the exact French word *tolérance* at all. Indeed he was a defender, but we should hold the estimation on whether he was the precursor of modern tolerance. To make the decision, we must continue studying Castellio's efforts as the headmaster and his other writing works that expect human perfectibility.